

ベルギーにおける地域で支える医療体制 ベルギー(ブリュッセル、ブルージュ、フルステ、ゲール、アントワープ) 2019年3月4日～3月11日 健康総合科学科 2年 遠藤菜々子

研修の目的

精神疾患または認知症と診断された後も地域社会で以前と同じように生活し続けるため、どのような支援体制がとられているかを学ぶ。

渡航先での旅程と活動内容

3月5日 Community Help Service

ベルギーの公用語が母語でない人向けの精神保健センターで、どのような体制でどのような支援を行っているのかをインタビュー形式で学んだ。



3月6日 Foton

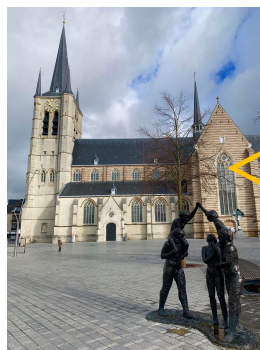
認知症の方とその家族向けに開かれている定期的な活動である音楽会に参加。その後、認知症の夫を十数年にわたり在宅で介護している方と、夫が若年性認知症と診断されたベルギー在住の日本人とお話をした。

音楽を楽しみましょう♪



3月7日 Het Ventiel

若年性認知症の方が社会から断絶されないように、様々なワークショップを開催している団体。9月の演劇発表会に向けて開かれた演劇のワークショップに参加した。ワークショップ後はカフェでおしゃべり。



3月8日 OPZ Geel

数百年にわたり精神疾患患者が第三者の一般家庭で社会復帰を目指して生活をする街ゲール。その仕組みを整備している団体の方にインタビューを行った。



3月9日 Museum Dr. Guislain

精神医学の歴史に関するガイドツアーに参加。今からすると驚くような現在は行われていない治療法から、現代にも引き継がれている治療法までレプリカや絵、写真も見ながら紹介してもらった。

研修を通して学んだこと

限られた資金の中で素敵なプログラムをつくることができているのは、人々のボランティアに対する敷居が低く、多数のボランティアにより活動が支えられているためだと感じた。現状足りておらず必要な活動・コミュニティを、必要だと感じた人が自分たちで団体を立ち上げて、一からつくりあげていることが分かった。そのようにして悩みを誰かに相談できる場所があることが、健康に支障をきたした後も地域から断絶することなく、生活できることにつながるのだと学んだ。

目的を達成できたか

ベルギーにおいて、地域社会から断絶されない工夫をとっている団体の活動への参加やインタビューを通して、何がその活動・団体を支えているのか大きな枠では捉えることができた。一方で、それを踏まえて今の日本には具体的に何が足りなくて、ベルギーで見た団体の良さをどのように日本において取り入れることができるのかまで深くは理解することができなかった。心配していた語学に関しては、意思疎通をはかることができたため、概ね満足している。

グローバルな視点とは何か

グローバルな視点とは、自分とは異なる多様な考えや価値観に目を向け、自分がすでに抱いている考えと比較できることだ。国は違えど、抱えている問題が同じだということはよくある。その問題へのアプローチの仕方やその背景となる考え方の違いを見出して、参考になる部分を積極的に取り入れることができれば、グローバルな視点を持っていると考えると考えた。

将来の進路決定へどう影響したか

人と人を結びつけることが問題を解決したり、より良い生活を送ったりするための鍵になると実感して、人と人をつなげてコミュニケーションが生まれる居場所をつくる活動をしたいと思った。

反省点

インタビューがメインの団体では、事前にインターネットで調べていた情報に大きくプラスして新たに得られた情報が少なかったように感じた。その原因としては日本の現状を詳しく知らないために比較ができないからだ。次回は事前に比較できるだけの十分な知識を蓄えてからインタビューをしたい。

後輩へのアドバイス

自分で一から計画を立てるのは大変ですが、研修後には大きな達成感が得られました。私は今回一人で団体を探し出し、アポイントをとって行きました。想像以上に大変でしたが、やりがいがあり、自分の成長の糧になったと思います。せっかくの機会が用意されているため、行こうか迷っている人もぜひ行くことをおすすめします。

研修支援制度に望むこと

- ・メールの文面のテンプレートや過去の研修プログラムの組み立て方などをまとめたものがあると参考になる。
- ・自分で計画を立てて研修に行った方にお話を聞いたり、質問したりする機会があると良い。